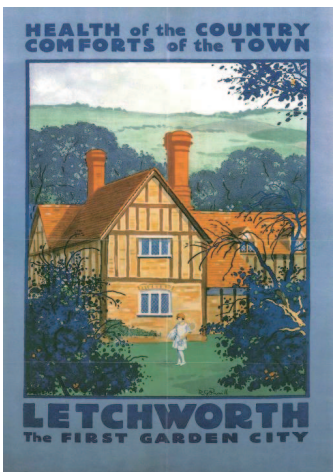


—第58編— レッチワース^{*1}、田園都市^{*2}の原点

これまですでに見てきたように、近代の歴史を振り返れば、現代の深刻な都市環境問題の萌芽は産業革命が急速に進行した19世紀初頭のイギリスに見ることができる。ドイツのエルンスト・ヘッケル^{*3}によるエコロジー（生態学）という概念が生まれる頃と前後しており、ロンドンをはじめとする工業立地都市におけるスプロールと、工場労働者の劣悪な居住環境が社会問題化していた。そうした背景にあつて、エベネザー・ハワード^{*4}による田園都市構想はその対極かつ現実的なユートピアの建設をめざす社会主義的な色彩の強い運動であつた。



図版58-1 レッチワース田園都市のポスター（1906）

しかしその主張は必ずしも都市の存在を否定するのではなく、都市と農村の長所を融合することであつた。そして、一定規模のコンパクトな構造を持つた「ガーデン・シテイ（田園都市）」を建設し、公有地やコモンを住人の企業体によつて運営することであつた。その際ハワードが示した5つの原則とは、①職

^{*1} Letchworth

^{*2} Garden City

^{*3}

Ernst Haeckel
(1834～1919): ドイツの生物学者、哲学者

^{*4}

Ebenezer Howard
(1850～1928): 近代都市計画の祖と呼ばれるイギリスの社会改良家

住近接、②適正規模（市街地…農地≒1…5）、③恒久的農業地帯の存在、④土地所有の一元化、⑤自立した都市経営、であつた。

その実例であるレッチワース（1903年開発開始）やウェリントン（1920年開発開始）の姿は近代都市計画のアイコンのように時代を超えて人々の脳裏にインプットされた。ポスターに描かれたその緑溢れる居住環境のイメージ（図58-1）は、その後の世界中のニュータウンやまちづくりに繰り返し引用されることになる。そしてハワードによつて「田園都市協会」が設立されて以来100年を経過した今、エコロジーやサステイナビリティの理念と重層しながら、まちの運営手法も含めて、現代の枠組みのなかで再評価されていることは周知のことである。

田園都市レッチワースは、コンペによつて都市計画家のレーモンド・アンウィン^{*6}らがハワードの思想を実体化した。19世紀に試みられた人間の居住環境の集大成としてお手本とも言ふべき確固たる位置を占めている。それを神格化するつもりは毛頭ないが、ここを訪れるたびに時を超える価値を備えた存在に魅せられる。そして、学びを新たにするのである。



写真58-1 レッチワースの戸建て住宅街



写真58-2 保全された広大なコモン緑地

^{*5}

Welwyn Garden City: 「ウェリン」と読む

^{*6}

Raymond Unwin
(1863～1940): イギリスを代表する都市計画家で労働者住宅の改善に注力した